

## 洪水ハザードマップを携帯電話で提供する実験に参加して

日本災害情報学会デジタル放送研究会代表 藤吉洋一郎

2008年2月24日、春一番の強風が吹き荒れる中、東京都板橋区の荒川右岸側の一帯で国土交通省荒川下流河川事務所が実施した表記の実験に、鷹野、谷原両研究会員と一緒に参加した。

実験の狙いは携帯端末にハザードマップを配信したとき、危険を知り避難場所を探してそこへたどりつくまでに、はたしてシステムの機能や現場での使い勝手はどうかなどを確認することであった。

実証実験は、2月24日(日)午前10:00～12:00にかけて行われ、参加人数は一般参加者32名、災害情報学会関係者など3名の計35名であった。

地元住民など参加者には、実証実験の約1週間前に、荒川下流河川事務所主催による事前説明会が実施されていた。事前説明会には、実証実験参加予定者の約半数(20名程度)が参加し、事務所から、荒川決壊時に予想される板橋区の浸水被害状況の概要説明とあわせて、実証実験の概要や携帯端末による洪水ハザードマップ配信システムの操作説明を行った(事前説明会に来られなかった参加予定者には、説明資料を後日事務所から郵送した)という。

避難訓練は以下の流れで行われた。

●10:00頃：

事務所から参加者にメールを送信し、訓練開始。

●10:00～10:15頃：

参加者は洪水ハザードマップの受信を確認した後、避難開始。

●10:15～12:00頃：

志村小学校、志村第四小学校の2箇所を避難所とし、各自の判断でどちらかの避難所に徒歩で移動。

避難所でアンケートを記入し、避難訓練完了。

### 携帯電話の画面でみるハザードマップについての感想

- ・画面が小さすぎて大変わかりにくい。
- ・地元不慣れな参加者には今いる場所がどこかとか、どこが避難場所として適当かなどとっさには読み取れない。
- ・避難場所を決めてそこへ避難するのに適当な経路がわからない。
- ・歩くにつれて方角が変わるのに、画面の地図の向きは北を上にしたままで、カーナビに慣らされた目には抵抗があった。しかし、「携帯端末の機種によらずできること」という制約の中での実験であり、これは求める方が無理か。

## まとめ

ハザードマップを携帯端末に送って、避難が必要なときなどの役に立てようという大変意欲的な試みは高く評価したい。しかし、携帯電話の限られた画面の中で命に関わる大切な情報を正しく伝えるには、単に地図を切り取った部分だけを見せるというのではなく、狭い画面の中で伝えるべき情報がキチンと伝わるような画面のデザインが必要だと痛感した。簡略化と強調を同時に実現するイラストマップの手法がいいと思う。

もう一つ、将来的には氾濫情報を刻々と携帯画面に送って、広範囲な被害の抑止に役立たいという計画だと思うが、その場合の地図表示も工夫の必要があると思う。

主催者がまとめたアンケート結果をみると、参加者には今回の地図でも結構役に立ったように見受けられるが、事前の説明会とか、おそらくは住民の中でも防災に関心の高い参加者に特化していたと考えられることなどから、これでよしとはしないことが大切だと思う。

一方、「機種によらない」という発想は大変大事なポイントだと思う。条件に合った特殊な人だけに伝えることのできる手段ではこまるのである。「いつでも」、「どこでも」、そして「誰でも」ということが、災害情報伝達の大切な必要条件だということを改めて痛感した次第である。



避難訓練の様子